バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第158号〔2018年4月〕

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 158 号をお送りします。今月は、久しぶりにルカ福音書の学びをしました。今回から8章に入り、1節から3節を読みました。

罪深い女が高価な油を主イエスの足に注ぎかけたことで論争になった事件のすぐあと、主は旅に出られた。言わずもがな、神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら町々を巡る宣教の旅だった。この頃には既に12人のほかに、多くの民が主イエスに病をいやしていただいたり、その教えを聞いたりして彼が神の子であることを信じ、一緒に移動していた。彼らは一様に主イエスがなさる奇跡の業をみてその力に驚きと、深い畏敬の念を抱いていた。

なかでもこの時代の男尊女卑社会にあって老若男女問わず恵を賜る主に、弱者である女性たちは打ちのめされていた。ガリラヤ湖の西にあるマグダラの町で育ったマリアは、詳細はわからないが7つもの悪霊（病など）から解放された経験から、主イエスが神の子以外にあり得ないというゆるぎない確信に至り、主イエスと旅を共にし、一行に仕え続けた。ちなみに、先の高価な油を主に注いだ罪深い女や、石打ちの刑に処せられるところを主イエスに命救われた女がマグダラのマリアだと言われたり、彼女は罪深い売春婦だったというコメントもよく見かけるが、これらの人物がマグダラのマリアであったとは聖書のどこにも記述がなく、売春婦だったという記録もない。彼女はごく普通の、しかし病を多く持つ婦人だったのかもしれない。

同じように、詳細はわからないが衝撃的な恵みの体験を通してマグダラのマリアと同様、主イエスを世話しながら共に旅をしようと決め、実行に移した女性たちの中には当時の政府高官の妻という、身分の高い女性もいた。その環境を離れて旅に出るとは、相当の体験をしたのだろう。彼女たちは皆、家族から離れても主イエスから離れられないほど主を信頼し、旅の間は次々に行われる神の御業を目撃し続け、権威ある教えを聞き続けた。奉仕者の受ける計り知れない大きな恵みである。

彼女たちはこの恵みに満たされ、喜んで自分たちの持ち物を出し合い、能力や技術も提供して主イエスの旅を支え続けた。お金や食い扶持のためではない、主イエスの宣教の業を支え、癒しの現場に立ち会うという毎日は、神様からよどみなく押し寄せる神の愛と神の恵みという報酬をいただく日々で、心に満ちてあふれ出る喜びが、主イエスを助けずにはいられない思いに駆り立たせていた。毎日受ける恵は彼女たちの疲れを取り去り、周囲の人々の批判的な言葉など耳にも入らなかった。

主イエスが最後の日に捕らえられ、裁判にかけられ、鞭うたれ、民衆の前に辱められ、十字架を背負って歩かされ、磔刑に処せられた間、12 弟子たちでさえわが身への被害を恐れて現場から逃げたり主イエスを知らないとまで言ったのに、彼女たちは主イエスを離れず、慰めようと努め、愛にあふれる眼差しで見つめ、周囲が何と思おうとイエスを見捨てることはなかった。だからこそ、復活された主イエスはまずその女性たちに姿を現して復活の事実を知らせるという、これ以上ない大きな恵みを示された。そして彼女たちは常識を逸脱したこの神の大いなる奇跡を真実な出来事として認識し、神の言葉は人間の常識では信じがたいことでも、本当に実現するのだという確信をここでもまた堅固にしたのだった。

キリスト教の世界において奉仕は重要なポイントを占めるが、それは「メンバーになったらやらなければいけないこと」なのではない。神との出会いを体験した者が、受けた恵の大きさによって喜びに満たされて駆り立たせられる自発的な行為であり、また奉仕を通して神のなさる不思議な業を見る体験を重ね、神の愛を再三確認し、イエス・キリストが本当に実在した神の子であることを何度も確信して信仰を成長させていただく、神様からの招きなのだ。奉仕は誰でもできるが、今まで虐げられてきた人々、軽んじられていた人々、理解されずにいた人々は特に顧みられ豊かに用いられて、今までとは違う「神に引き立てられる人材」へと引き上げられていき、真実に幸福な人生へと移行する。神は愛だからです。